子ども叱るな来た道じゃ

三好京三著

年寄り笑うな　行く道じゃ」

味わいのあることばである。

きだみのるは八十歳で大往生するまで、まちがいながら学者として作家として、また親として生き、わたしもまた五十三歳の今日まで、まちがいながら教師として物書きとして、また新米の親として生きて来た。娘もまた親のようにまちがいながら（娘のことばによれば、迷ったり屈折したりしながら）生きていくのである。わたしはそれを、期待にこたえてくれない不満をおさえながら、

「子ども叱るな　来た道じゃ」

と見ているほかはない。

昭和六十年一月　　三好　京三

子ども叱るな　来た道じゃ

三好京三

子ども叱るな　来た道じゃ　目次

大学進学に関する親と子――9
愛のない親子なんて……――14
迷える親と子――20
教師と親の間――26
親心――32
娘の自立――38
厳格と温情――44
娘ひとり旅――50
合格発表――55
雷親父考――61
雷親父再考――67
親の不安――72
ザリガニと子ども――78
共同生活――84

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ああ、予備校生――90
娘の青春・親父の青春――96
三毛猫ジャガー――102
結婚したい人――108
婚礼に泣く――113
おどり食い――119
カガヤキ――124
自立を見まもる――130
親離れと子離れ――136
ない子には泣かぬ――142
貞女二夫に見(まみ)えず――148
子離れと家族離れ――153
家庭的……――158
受刑者の子――163
親ばか――169
おひな様波瀾万丈――174
銀行振込み――180

友だちのような親子——186
外人夫婦——192
蹴るな——197
あとがき——203

装幀　渡辺公夫

子ども叱るな　来た道じゃ

大学進学に関する親と子

Lという少年が、程度としては高い方に属するR大学を受験した。手ごたえはあったが、いくら待っても合格通知が来ない。あきらめてLは喫茶店のボーイになった。ところが数年後、Lは箪笥（たんす）の抽き出しから、二つに引き裂かれたR大学の入学許可書を発見するのである。それを破いてLの目にふれぬようしまいこんだのは、彼の父親であった。

この話をわたしに教えてくれたのはY子である。Y子はわたしにとっては義妹にあたる中年女性だ。実は、Y子はこの少年の世話を、彼の祖母から頼まれていた。Lはばばっ子で、女の子のようにおとなしく、ひよわであった。ある高校に入学したが気に入らず退学し、Y子につきそわれて別の高校に入り直したりもしている。

そのように頼りなかったLが、R大学に合格するとは大したものである。Y子の世話が効果的だったのであろうか？　しかしながら、父親は入学許可書を破り、息子を大学には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やらなかった。
Y子は事の次第を知って地団駄を踏んだ。
「なんてむごい父親でしょう。自分はビデオやらステレオやらを若者みたいに買いこんで……ほんとに勝手だわ」
この父親は、電気製品が特別に好きなのだそうである。
わたしも、人ごとならずLの父親を憎んだ。無知、無理解、全く勝手な父親ではないか。そして――
今から三十年ほど前のわたしも、やはり根限り、自分の両親を怨んでいたのだった。高校を終わろうとしていたわたしは、東京のW大に入学を希望していた。期限がせっぱつまってからわたしは父に言った。
「W大に受験の願書を出すから、三千五百円くれ」
父はこたえた。
「そんな大金はない。もっと早く言ってくれればよかったのに」
それでわたしは願書が出せなかった。当然のことにW大は受けていない。怨みが残った。
――貧困とはつらいものだ。それにしても、わが両親は、田畑を売るなり、仕事にさらに精を出すなりして、俺の進学の道をひらいてくれてもいいのではないか？　無教養、無理解な両親を持った俺は、この上なく不幸な人間だ――

三、四年もすれば、怨みは消えるかも知れないと期待した。そうではなかった。五年たち、十年たっても、W大を受験できず、大学生活を体験できなかった悲しみは胸底にうごめき続けた。あとで、わたしは両親が親戚の者たちに洩らしたということばをきいた。

「大学に入れるために、田畑まで手放すわけにはいかねえ」

父は、あのとき手もとに金がなかったばかりでなく、わたしを進学させる意志が全くなかったのだ。

そのような経験を持っているから、わたしはY子といっしょになって、L少年の父親を憎んだのだった。

しかし、ふっと考えた。Lは、受験後、友人とかその他に、合否電報を頼まなかったのか？　また、合格通知が来ると思われるころ、胸をときめかして自宅に待機していなかったのか？　地方新聞には合格者名が掲載されるが、それも見なかったのであろうか？

これらすべてのことをしなかったとすれば、やはりLは、人間として頼りがなさ過ぎる。そう言えば、高校卒業後も、Lはずいぶん長い間、Y子を「おばちゃん、おばちゃん」と力にし過ぎていたのである。青年ではなくて少女のようである。Lの父親は、そのようなLの自立心のなさ、かよわさを見てとり、大学に入れても仕方がないと判断したのではないだろうか？　入学許可書を破ってしまいこんだのはそのためで、あるいは、「たとえ合格したところで大学には入れない」と、はっきり言明もしていたかも知れない。

すると、Lの父親はむごいのでも、勝手なのでもなく、剛直なのだと言えないであろうか？　たくましい青年だったら、受験し、合格したならば、あらゆる手段をつくしても大学を卒えるに違いないのである。

そして、三十余年前のわたしにしても、それほどしつこくW大に入りたいのだったら、前もって資金準備等を計画的にやるべきであった。その年入れなくとも、翌年まで教師をしながら貯金をするという手もあった。それをやらなかったというのは、わたしが甘かったからである。親に頼らず、自分だけの力で大学に通った者は古今に数多い。にもかかわらず、わたしは親から三千五百円もらえなかったからと、受験さえしなかったのだ。

Lよりもふがいないことになる。Lはどう受験料を工面したのか、Y子につきそわれたのか、とにかく受験し、合格したのだ。わたしはそれもやっていない。となると、そのようにふがいない、自立心のないわたしを、東京に出そう、大学に進ませようとしなかったわが両親の方針は、Lの父親同様、正しかったのかも知れない。知れない、ではない、正しかったのである。大学は、親から入れてもらうものではない、自分が入るべきところなのである。わたしはひじょうに遅くそれに気づき、のち通信制の大学に入って、四十歳で卒業した。

今、高校生の四〇パーセント近くが、大学その他の上級学校に進学するという。うらやましい話である。しかし彼等は、果たして強固な自分の意志をもって進学するのであろうか？　もし、その受験生たちの親のすべてが、Lやわたしの親のように進学に反対したならば、四〇パーセント近くという数字は、どのように変わるものであろう。ねたみからではなく、調べてみたい気がする。

愛のない親子なんて……

わが家内は、山の分校の女先生であった。教育論を勉強することはあまりなかったが、面倒見がよかった。加えて明るい家庭に育っていた。教育論がないという点ですぐれた教師ではなかったが、山の子どもたちから、母親のように慕われた。理屈を勉強し、そういう点で教師的であったわたしは、人間としてはものぐさでずぼらだったから、子どもたちからはなにやら疎まれていた。

この二人には子どもがなかった。さまざまないきさつがあり、中学一年になろうとしていた都会生まれの少女を娘にもらった。未成年を養女にするときは、家庭裁判所の認定を得る必要がある。そのとき、少女の実の母親は娘を養女に出す理由をこう申し述べた。

「この子が、女先生を慕うものですから」

実際そうであった。少女は男先生は警戒していたのである。この場合も、わが家内は、

生得的な母性を慕われたのだ。

さて、新しい三人の生活が始まった。

男親であるわたしは、あきらめてしまっていた子を思いがけず恵まれ、有頂天になった。毎日、毎日が楽しくて仕方がなかった。子育て論は二の次で、とにかく、猫っかわいがりにかわいがるようになった。

女親である家内もそのように見えたが、やがてのんびりと構えているわけにはいかなくなった。娘は身のまわりのしまつがあきれるほど悪いのである。朝決まった時刻にきちんと起きて洗顔、食事という、幼児さえできる日常の生活習慣もついていない。せっかくつくってやった娘の部屋は、年中ごみ箱をひっくりかえしたよう――

やがてわたしは文学賞を受賞し、目がまわるほど忙しくなった。娘の教育はますますおろそかとなり、たまに会えば会えなかった分の埋め合わせをつけるように一緒に遊んだり、散歩に出かけたりした。

家内は責任を感じた。娘教育は自分が一手にひき受けなければならない。なにしろ娘は幼児のできることさえできないのだ。ひとりだちできる人間を育てるのが教育の目的であるが、初歩からやり直しをしなければならない。

「アイロンをかけたら忘れずにスイッチを切ってね」

「水の出しっ放しはだめよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com